

雑 録

故郷の愛

阿 山 生

一

木の間に小休求めんと、

離もふたゝび歸り來る、

またしき父母と兄弟と、

在ます舊巢に今ぞ入る。

二

誰か吾家をあたなりと、

嘆たん人はいくとばく、

愛たさもも多かれど、

ひなの吾家に何ぞすぐ。

三

幾世變はらぬふる里に、

置いたるしもの父母は、

日ごと夜毎に夢にたに、



杜甫が『春歸』の詩句も、想ひ出でられて妙を穿つ。そもや蹄輪の簇る所、黃塵の漲る所、譏譽の雨注する所、褒貶の集まる所、濁流滔々の熱蘭界より出で、優に聞天樂地の家庭に還らば、誰か「バヌマン」が、天路歷程の虚榮城中より、迦南の樂土に來たる感なからん。

思ふに、家庭の懐かしきは、競争場裡の失墜に陥いりし人にありて始めて之を知る。

君見すや。遠く萬里の波濤を蹴りて、酷熱樹を枯らし砂を燒き、而かも人を熱殺する赤道直下の東印度に來り、智謀をもて、富力をもて、但しは干戈を以て、瞞着、籠絡、壓服、一億の印度土民を一律の下に従へ、森波濤々たる『古漢厘』岬より、白雪皚々たる『比馬刺夜』山下に至る迄、其政權を擴げ、前古未有の廣版圖を領し、『亞巴』の城下に、平和の條約を結ばしめたる『具來武』も、彼が當初『馬士刺斯』に在りし日は、日夜憲郷の海潮に驅られて、其平日の傲慢不屈なる氣質にも似合はず、いと優しき語調を以て、左の如く故郷の親戚に寄せしにあらすや。

“ I have not enjoyea one happy day since I left my native country; I must soufess, at intervals, when I think of my dear native England, it affects me in a very particular manner…… if I should be so far blest as to revisit again my own country, but more especially Manchester, the centre of all my wishes, all that I could hope or desire for would be presented before me in one view.”

又見すや。天涯孤容の身を以て、『具來武』と共に千軍万馬の間を驅馳し、『謨賀留』大帝を滅し、東亞英國の大基礎を建て、人をして英國の領地に太陽没せずと叫ばしむるに至りたる、而かも『大不利典』の

擴張を以て、一身に纏ひし「死連、兵斯質其斯」も、其征馬の嘶く所、其劍戟の閃めく所、其砲聲は轟く所にありてすら、故郷「泥列斯堡土」(英國)を忘れざり去にあらすや。酷く言へば、彼は故郷の快樂を得んために働かしなり。抵當となりて、人手に入りたる祖先の地を得んために戦ひしなり。

南洲翁は一代の豪傑なり。而かも彼が競争場裡に失敗せし時は、故山に還り、犬馬を侶とし、悠々以て故郷の愛を嘗めしにあらすや。誰か凡骨の我等が、故郷の愛を説くを以て笑ふに堪へたりと爲すか。吾古郷には、最愛なる兄弟の在ますものを。最愛なる父母の在ますものを。

さて我、他郷に在りては、一個の「食ひ且つ息ふ」動物に過ぎざるも、家に歸りては、「エデン」か但しは「パラダイス」の小王の如く、愛せられつゝ又敬せらる。父母常に語り給へり、「故郷より懐かしき所はなく、父母より親しき者はあらじ」と、我今にして其言の眞なるを知る。

わゝ、斯く幽かしき樂園、此く懐かしき家郷に、我如何なれば疾く歸らざりしぞ。而かも我の不孝なる、來書の短さを父母に咎めては、吾音信の少なるに注意せざりき。父母老ては生命を子に懸けぬるものを、我如何なれば無心に過ぎしぞ。吾力の足らざる故か。否否。我も亦少しく思ふ所あればなり。左れば大器晩成を説きつゝ、そが心を慰めつるも、歲月は人を待たず、我心悲なき能はず。

我は、父母の顔を見上ぐる毎に、其笑顔も亦涙多きを認む。我は感謝す。吾父母の五十年の千辛万苦、我らのためにあらすして、其將た誰の爲めぞ。彼等自ら辛苦の程を口にせざるも、其額に形はれたる波線の數多きは、其が苦心のほどを證して餘あるなり。彼等尙は康かなるも、老の霜は早や其頭上に降りぬ。わゝ我、如何にしてか其恩愛に報いんとする。

千歳の學問を修め、一世の名流と交はり、爲すことなくば止まじと期したる我も、斯かる優しく懐かし

き父母の前にては、只是れ無若氣なる一個の頑兒。功名もなければ、利達もなし。あゝ我いかにせん。」然りと雖も、人は家庭にのみ巢を結ぶ穴居的のものにあるべからず。せめて一度は社會に出で、競争場裡に馳驅せざるべからず。幽谷の黃鳥も、喬木に遷り、玉も磨かざれば光なしとかや。知る、我が春の朝、秋の夕、我々として勉むる所以のもの、亦其故郷の愛に報ゆる一なることを。

## 遠航の記

遠航者の一人

人生恨多しと雖も驚天動地の偉才を抱きながら徒らに軀幹の脆弱を慨き拔山倒海の勇氣を有えながら空しく泉下の鬼となるに優れる恨は無かるべし。こゝに於てか世界到る所体格の養成に力を用わざるはなし而して其体格を強健ならしむる所以のものは其の種類極めて多かるべま。雖もかの漕艇は其の目的を達するに都合よきは稀なるべし。當に体格を強健にするのみならず又精神を活潑ならしむるにこよなきものなるべし。試に思へ漫々たる湖上岸頭の翠綠これに映じて目もあやなる所一葉の端艇を浮べて操櫂一番すれば舟は鏡の如き水面を滑り身は彩雲に乗じて走するが如く心は恍として仙境に遊ぶその愉快果して幾何なるかを又思へ大海波鴨つて雲月影を蔽ひ回顧茫として東西を辨じ難き所忽ち高く波上に浮び忽ち深く水底に沈み風は將さに舟を覆さんとし波は冷やかに肌を露はすの時一擧以てこの風に抗えこの波と戦ふその勇壯果して如何膽を練り体を鍛ふその得る所果して幾何なるかを

七旬の夏体もとより綠蔭讀書の娛もあらん清流釣魚の樂もあらん白砂青松の間に涼を納るゝの快も